



「自尊感情（自己肯定感）」と「自己有用感」，どっちが大事？

No.5で「自尊感情」（「自己肯定感」）と「自己有用感」の違いについて述べましたが、それは、自尊感情（自己肯定感）は自分に対する自己評価が中心で、自己有用感とは自分に対する他者からの評価が中心ということでした。

例えば、足の速い子どもがいたとします。「君はクラスで一番足が速いね。」と大人に褒められると「そうか、ぼくは足が速いのか」と自分で自己評価して自信をもちます。この子にとっては「足が一番速いかどうか」が何より重要なことです。ですから、他のクラス、他の学校にもっと速い子がいて、その子たちと競争して負けてしまうとその自信は簡単に失われてしまいます。

では、ただ単に「クラスで一番足が速い」と褒められただけではなく、「クラスで一番足が速く、それをみんなが認めてくれたのでクラスの代表に選ばれた」としたらどうでしょう。これには他者から認められたという要素が入っています。きっとこの子は、「みんなの期待に応えられるようにがんばろう」と思うはずです。仮に他の子に負けたとしても、この子にとっては「みんなに認められて選ばれた」ことの方が大事なことであり、「足が一番速い」ことはさほど重要なことではありません。ですから、たとえ競争に負けたとしても、認められたという自信がなくなることはありません。

つまり、自分に自信をもつ自尊感情は大切ですが、自己有用感に裏付けられた自尊感情が大切なのです。

「褒める」ことで自尊感情は高まります。しかし「自尊感情」が高いことは、必ずしも「自己有用感」の高さを意味しません。「自己有用感」も高めるには、ただ単に「褒める」だけでなく、「認める」ことが必要です。例えば、子どもを「頑張ったね」とだけ褒めるのではなく、その子どもが「こだわった」「見てほしかった」ことを認めてあげることが大切ということです。

(なんだかまたよく分からなくなってきたところで次号に続く・・・)

「あいさつ三つのおきて」がんばるぞ！「あいさつ集会」

先週の水曜日（26日）に、スマイル内小っ子委員会主催で「あいさつ集会」が行われました。あいさつの悪い例と良い例の寸劇があり、あいさつ三つのおきて「相手の目を見て・大きな声で・はきはきと」が発表されました。その後、各学年のあいさつ名人の発表とその名人の後に続いての練習が行われ、全校児童が大きな声であいさつを交わしました。よい生活習慣の定着のために、学校と家庭であいさつを大切にしていきましょう。



(集会の様子は HP でもご覧ください。)

よい連休をお過ごしください。